富士に祈る 73

國學院大學兼任講師　城崎　陽子

信仰と伝承 ―初申祭―

先回は、一年を通じての行事の中でも頭初にあたる「胎内祭」を取り上げて、その起源や吉田胎内における行事の模様を記した。今回は北口本宮冨士浅間神社の「初申祭」を取り上げ、富士山の伝承に関わる当該の祭礼の模様を記しておく。ちなみに、当該の祭礼は北口本宮冨士浅間神社が「大祭」として行うものである。

「初申祭」は例年五月五日に行われる。この行事の由来を紐解くにあたって、当日に北口本宮冨士浅間神社で配布されている「初申祭縁起」(以下、「縁起」とする)をみてみたい。なお、読み易さを考えて文中にふりがなを施した。

初申祭縁起

北口本宮冨士浅間神社

社記によれば、六代目天皇にあらせられる孝安天皇九十六年の年に、それまで雲霧に包まれていた富士山が忽然とその姿を現したと伝えられています。

その年が「庚申」の年であった為、当神社では古くより申の年、申の日を縁起として祭礼を行ってきました。特に六十年に一度巡り来る「庚申」の年は、「御縁年」とし、式年大祭を執り行っています。(前回の庚申は昭和五十五年)

この「初申祭」は、御祭神が、農耕特に養蚕に対してのご加護が篤いので、農耕が始まる時期に例祭が選定されたと考えられ、旧暦四月の最初の申の日と定められました。故に「初申祭」と申上げます。

「縁起」によれば、それまで雲霧に包まれていた富士山が「孝安天皇」の御代に忽然と姿を現したこと(①)、その年が「庚申」の年であったことから、申の年、申の日を縁起として祭礼を行ってきたこと(②)、特に六十年に一回の「庚申年」は「御縁年」として「式年大祭」を行うこと(③)、さらには御祭神が養蚕に対して「加護」が篤いことから、旧暦四月最初の申の日が祭日に定められたこと(④)などが伝えられている。また、当該の「縁起」の最後には、小字で次の件も記されている。

明治五年、我が国に於いては太陽暦から現在の太陽暦が採用されました。同時期、国家を挙げて全国の神社の祭礼や制度などが整えられ始め、四月最初の申の日では毎年日が一定しない為、山梨県からの献幣使参向の都合上明治四十二年より五月五日と定められました。

この小字の記事は、④にみえた祭日について、「旧暦四月最初の申の日」が明治四十二年から「五月五日」に固定した経緯を示している。

さて、①にみられた初申祭の由来は、『御大行の巻』以来、富士講の『御伝』にも記されている「富士の湧出譚」である。その始源を「孝安天皇」の御代とするか、「孝霊天皇」の御代とするか、伝承がわかれている。例えば高田藤四郎からの流れを汲む丸藤宮元講の『御伝』には以下のようにある。

抑々富士山は天地開闢より出現の御山にして万物出生の根源なり。然るに神々の御代すめを天照大神の御孫地祇三代に、ぎのみことの御きさきをこの花咲や姫の尊と申奉る。其後富士山に御鎮座ましまして守護神浅間大菩薩とならせ給ふ。時

三申の御神像

に人皇六代孝安天皇の御宇までは雲霧はれ給はず人皇七代孝霊天皇の御宇孝霊元年かのへさる六月朔日卯の刻より御山の雲きれすみやかに晴れあらはれ給ふが故に霊山と名付け給ふ。

(丸藤宮元講『御伝』より)

このことは、「孝安天皇」にせよ「孝霊天皇」にせよ、「欠史八代」と称される御代に縁起が収斂されていく現象を示しているととらえ、むしろ、「湧出」が「庚申年」であったことの方が重要であると考えるべきであろう。また、「富士の湧出」が「庚申」年であったことから「申の日」「申の年」を尊び、「庚申」の年を「御縁年」とする発想は、例えば、『御大行の巻』に記される御祭神の使いを「申」とする伝承とも合致していく。

さらに、④にみえる「養蚕の加護」であるが、これは『富士山の本地』(『室町時代物語集』三に所収、井上書房、一九六二年)に伝えられる「金色皇女」の物語り等を発端にして、我が国に養蚕の伝わったことと富士山との縁を説くことに拠る伝承である。

祭礼当日は、午前八時に御神体である「三申(見ざる・聞かざる・言わざる)」の御神像を末社「日枝社」から北口本宮冨士浅間神社拝殿前に設けられた「仮宮」に御遷座することから始まる。午前十時前には参進の神職以下、参列の人々が祓所に集まり、修祓を受けたのちに拝殿へと昇殿する。「宮司一拝」に続き、「御扉開扉」「献饌」「宮司祝詞奏上」「献幣使祝詞奏上」「玉串奉奠」「参列者玉串奉奠」と続き、参列者の代表が挨拶をして正午ごろ式典は終了する。なお、この日「三申」の御神像は午後三時に元の日枝社へ還御するまで参拝を受ける。

初申祭は、「富士の湧出譚」や「庚申」年の由来が縁起として結びつき、祭礼が執り行われている点に「縁起と祭礼」による「信仰の回帰」が行われていると考える。年年歳歳人々は祭礼を繰り返すことで「信仰」は始原へと回帰して存続されるのである。

御神像の遷座

糧命は施すは多

句・菅谷秀文　38

絵・橋本豊治

寄進したるは須達多 祇園精舎

須達多「よく布施し人」を意味する。舎衛城の長者であり、慈悲深く、貧しい人や身寄りのない人の面倒を見て、彼らに衣食を給していたので、「給孤独(孤独な人々に食事を与える人)」と呼ばれていた。

精舎を建設するにふさわしい候補地であったこの祇陀園(祇園)の所有者はジェータ太子、この土地一杯に金貨を敷き詰めたとしても売ることはできないと言ったのであるが、須達多長者がこの土地に金貨を運ばせるのを見て事情を聞き、その土地を提供したという。

僧房、勤行堂、井戸や池などが作られ、祇園精舎は完成し、寄進された。